

2023年度「B&G海洋性レクリエーション指導員」
第7回センター・インストラクター養成研修 実施報告書

2023.7.20
事業部 事業課

B&G海洋性レクリエーション指導員規程 第3条に基づき、下記のとおり研修を実施し、59名が課程を修了したことをご報告いたします。

記

1. 「事業概要」及び「修了試験結果」並びに「登録認定課題」について

【事業概要】

本研修は、海洋性レクリエーション（以下、海レク）活動や水泳指導、地域コミュニティの活性化を担う人材であるB&G海洋性レクリエーション指導員（以下、B&G指導員）を育成し、習得したプログラムに基づく実践活動を通じて、青少年の健全育成や海への理解促進、地域住民の健康増進、地域の発展に寄与する目的で実施するものである。

2023年度「B&G海洋性レクリエーション指導員」第7回センター・インストラクター養成研修は、沖縄県本部町B&G海洋センターにおいて、6月4日から33日間の合宿研修を開始した。

研修開始21日目の6月24日から新型コロナウイルス陽性者が発生し、研修終了までに、合計20名の陽性者が確認された。昨年度とは異なり、陽性でも退所とはしない対応を取ったため、研修期間中に11名が、研修に復帰することとなり、7月6日に59名が修了した。

ただし、9名が陽性、体調不良にて、修了式に参加できなかった。

【修了試験結果】

研修生 59名全員が学科試験および実技試験（ヨット、カヌー、水泳、ロープワーク）に合格。

※修了試験の内容・試験項目・合格基準については、「B&G海洋性レクリエーション指導員 養成研修の修了試験に関する達」に基づき実施した。

【登録認定課題】

研修修了者は、所属海洋センターにおいて以下の登録認定課題を行い、実施内容を明記した「実績報告書」を2023年9月29日（金）までに提出したものに限り、資格の認定・登録を実施する。

◆資格認定条件となる認定課題

- ① 海洋性レクリエーションの指導または指導補助を行う
- ② 水辺の安全教室の指導または指導補助を行う
- ③（新規項目追加）海洋ごみの削減に向けた「啓発活動」及び「清掃活動」を行う
- ④（新規項目追加）食品ロス削減活動を行う
- ⑤「リーダー研修」を開催し、3名以上のリーダーを養成する
- ⑥ 所属する海洋センターの指導者等に研修で習得した内容を伝達する

2. 期間 2023年6月4日（日）～ 7月6日（木）（33日間）

3. 場所 沖縄県本部町B&G海洋センター（マリニピアザオキナワ）

4. 参加者及び修了者

【6/3 受付時点】 男性 53 名、女性 8 名 合計 61 名
 (最年長者：63 歳、最年少者：19 歳、平均年齢：28.2 歳) ※参加者名簿 別紙

【7/6 修了時】 男性 52 名、女性 7 名 合計 59 名 ※修了者 59 名
 (最年長者：63 歳、最年少者：19 歳、平均年齢：28.4 歳) ※参加者名簿 別紙

5. 研修スケジュール及び履修時間

履修時間 計 243.0 時間 (規程時間 180 時間以上) ※研修スケジュールは別紙

6. 沖縄研修のコロナ対応及び天城町での実施対策 (案) について

項目	沖縄研修 (実績)	天城町での対策 (案)
基本的な感染防止対策	マスク着用、ソーシャルディスタンスの確保、手指消毒の徹底	同様の対応を行う
コロナ対策配付物品	不織布マスク、手指消毒液、清拭用消毒液、ペーパータオル、非接触型体温計	体調不良が発生した際に、部屋移動を行うため、体温計はそれぞれの研修生が持参することに変更する
事前及び到着時 PCR 検査実施	事前に自治体において、PCR 検査の実施を必須とする また、到着時に PCR 検査・抗原検査を実施する	同様の対応を行う
陽性者の対応	陽性者は退所せず、体調が回復し、抗原検査が陰性となるまで、居室にて療養	同様の対応を行う
発熱等の体調不良者の対応	発熱等の体調不良が発生した際、即隔離し、研修に参加させない	同様の対応を行う
研修開始前の看護師による健康チェック	那覇空港における看護師 3 名による健康チェック	看護師を調達の上、同様の対応を行う
毎日の検温、体調チェック	一日 3 回の体温、健康チェック	同様の対応とし、毎回教官へ報告を必須、体調不良者は即隔離を徹底する
最寄り空港からの移動手段	那覇空港から財団が手配したバスにて、研修地まで送迎	宿泊施設のバスまたは送迎車を手配し、徳之島空港から研修地までの送迎を実施
共有スペースの使用制限	大浴場の利用制限 ※1 回目の休務日まで大浴場の使用禁止	同様の対応を行う
休務日の対応	休務日の外出禁止	同様の対応を行う

日用品の買い出し・飲酒の対応	休務日のみコンビニへの日用品の買い出し及びボートハウス前での飲酒を許可した ※1回目の休務日まで飲酒禁止	同様の対応を行う
居室定員	定員4名とした	定員2名とする
指導スタッフの事前検査	PCR検査の実施を必須とした	同様の対応を行う

7. 前回からの「改善事項」及び今回の対応・課題について

(1) **コロナ陽性を退所としないなどの各種コロナ対応について**

- ・今年度はコロナが5類になったことから、コロナ陽性となっても退所とせず、陽性者は発熱などの症状が収まり、抗原検査で陰性になるまで、療養することとした。
- ・今回、第一号のコロナ陽性者が出た際に、研修期間を通じて、陽性者が初めてであったため、拡大を懸念し、陽性者の同室者を名護までPCR検査の受診に行かせた。
- ・その後は、医療用抗原検査キットでの陽性が判明したため、同室者も病院の検査ではなく、購入済の抗原検査キットで判定する対応を取った。
- ・結果として、初回と二回目以降の同室者への対応が異なったため、研修生からは不満の声や対応の一本化の要望があった。

【今後の対応】

- ・沖縄での対応を踏まえて、次の表の対応案に一本化し、天城町研修参加予定者に対して、再度コロナ対応を伝えて、十分に対応を理解した上で、参加してもらうこととする。
- ・来島時のPCR検査及び抗原検査以降の研修期間中での検査は、すべて財団が購入した抗原検査キット及びPCR検査キットにて、実施することに統一する。

想定ケース	対応(案)	備考
陽性となった場合	本人 別室での隔離、療養 同室者 無症状の場合、対応なし	陽性者の研修復帰条件 発熱等の症状なし、かつ、 抗原検査が陰性であること
発熱等の体調不良者の発生	本人 別室での隔離、療養 同室者 無症状の場合、対応なし	体調不良者の研修復帰条件 発熱等の症状がなくなること

(2) **研修生のPC持参及び講義資料のデータ共有、メールで教官からの指示について**

- ・今回から初めて、研修生にPCを必ず持参するように事前に指示し、研修効率をあげるため、次の対応を行った。
 - ア. 講師による講義データを研修生へ配付、課業内での研修生のPC使用を許可
 - イ. 重要な事項については、教官からメールで全員に伝達
 - ウ. 研修中の提出物や参加者アンケートはメール提出やグーグルフォームを活用

【結果】

以下のことから、今後の研修でも研修生の PC 持参及び ICT を活用していくこととしたい。

- ・ 講義資料をデータで配付することで、印刷時間及び紙やインク代を削減した
- ・ 講義中に研修生の PC 使用を許可したことで、PC での講義中のメモや PC 画面で講義資料が確認できるため、より講義が理解しやすくなる一助となった
- ・ 教官からメールで一斉に研修生に対して、指示事項を通知することができ、研修生の伝達もれが発生することを減らすことができた
- ・ 研修中の提出物やアンケートを電子化することで、効率のよい課業運営を行うことができた

(3) **日朝点呼の抜き打ちテスト、毎朝のラジオ体操テストの実施について**

- ・ 昨年度の天城町の研修において、日朝点呼での研修生の動きが機敏でないとの指摘があり、担当課としては、改善が必要であった。
- ・ 今回、日朝点呼時の所作について抜き打ちテストの実施や毎朝ラジオ体操にて、テストを実施した。
常に緊張感を持たせ、教官が研修期間を通じて、日々指導を行うことを徹底した。
- ・ 結果としては、点呼でのきびきびとした行動を見ることができた。

【今後の対応、課題】

- ・ 礼節を表現する一つでの集団行動法は、研修全体の雰囲気やグループの一体感を醸成するために必要不可欠であるため、今後も毎日の徹底した点呼とラジオ体操の指導を行う。

(4) **研修の退所基準・研修全般のレベルアップ、中間試験の実施について**

- ・ 研修初日の泳力判定試験で、大瀧村の研修生が 20m の結果となり、退所した。
- ・ 退所後の事務手続きの際に、上席が退所届の提出に納得せず、退所届での提出が遅れた。
- ・ 今回のケースでは、募集要項に記載している参加資格が満たないことを再三に渡って伝え、最終的には退所届の提出を得た。
- ・ 泳力判定の実施により基準に満たない泳力の研修生がいなくなり、研修全体の泳力は高くなり、より高い指導内容を提供することができ、全体的なレベルアップが見込める。
- ・ 中間試験については、研修生本人や担当課が現時点での習熟状況が把握、見える化でき、有効である。中間試験の結果を踏まえて、修了試験の合格に向けて、必要な時間と労力を投入し、研修生を修了に導く対応が取れる。

【今後の対応、課題】

- ・ 研修参加者本人だけでなく、上席の認識が「研修に派遣すれば、泳力がなくても、資格が取得できる」と考えるケースもあり、そのような自治体には、説明の上、過去の研修とは違う旨を毅然と伝えていく。
- ・ 中間試験は修了試験とセットで実施していく。

(5) **選択研修の実施（防災研修・水泳研修）について**

- ・ 今回の選択研修は防災と水泳の選択研修を設定し、前回同様ほぼ同数の受講者となった。

- ・防災研修の内容が2馬力救助艇等を使った救助訓練を計画しており、マリン関係の要素があると判断し、事業課ではもう一方の選択研修を水泳研修として、中村真衣氏に依頼した。
- ・担当課から中村氏、木尾氏へ依頼した内容は、コロナの陽性者が増えている時期であったため、「密にならない内容での水泳実技」及び「講師と同性の研修生への接触への配慮」の2点であった。
- ・中村真衣氏の研修生の泳法を撮影した動画の解説などは好評であり、評価は高かった。しかしながら、参加者のアンケート等など研修生からの意見によると、担当課が依頼した内容は、どちらも守られず、この点については参加者から不評の声が多かった。

【今後の対応、課題】

- ・選択研修を続けていく場合には、防災事業担当者との相談の上、研修内容が異なるものを用意し、研修生の興味を引く内容を提供していきたい。

(6) **女性教官の配置及び通し教官3名体制へのご配慮について**

- ・女性研修生からの声を直接聞く機会があり、研修序盤は、特に生理痛やホルモンバランスの関係で、気軽に相談できる女性教官がいてほしかったとの意見があった。
- ・沖縄では、鈴木、東條、種継が通しの教官として、研修に従事した。
天城町では、鈴木、東條の2名体制での実施を検討しているが、コロナ発生やケガ、病気など、研修期間の中で、イレギュラーが発生した際に、通し教官を配置できることが望ましく、3名の通し教官の中で、当直制などにより、負担軽減を行うことも可能である。

【今後の対応、課題】

- ・研修期間を通じて、どの時期にも女性教官に相談できるような配置を考慮していきたい。
- ・来年度以降も、通し教官が3名体制で実施できるように、役員へご配慮をお願いしたい。

8. スタッフ全体反省会について

以下の日程で、事業課・教官スタッフ・財団研修生が参加する全体反省会を行った。

日時：7月18日 10:00～12:00

場所：B&G 財団 大会議室

参加者：東條、持田、鈴木、中島、大久保、竹谷、鴻巣 7名

内容：・研修生のPC持参による講義資料のデータ提供があったのは良かった

- ・女性特有の問題があるため、相談できる女性教官がいてほしかった（特に研修当初）
- ・後半の選択研修の水泳実技において、講師による研修生へのボディタッチと密になるプログラムがあり、慎重な対応が必要ではなかったのか
- ・研修生は募集要項ではなく、後に送られる参加要項や持ち物一覧をよく読むため、マリンスポーツに不慣れな参加者でもわかるような持ち物の名前やなぜ必要なのかを書いてほしいとの要望があった
- ・ヨットやカヌーの艇を研修生に配艇する際に、全員で実施し、どちらのグループも実技時間や陸上シミュレーションの時間に偏りがでないように、配慮することが必要

である

対応：反省会であがった意見は、すべて担当課において対応できるため、天城町からすぐに対応し、よりよい研修となるように進めていく。

今後も、全体での反省会は必要であるため、研修修了後すぐに実施できるよう日程調整をあらかじめ、行う。

9. 今後の研修の方向性（案）

本研修の課題を次の2点があげ、今後の方向性として進めていきたい。

(1) （課題1）公務員と指定管理者の役割の違い、技術レベルの相違

- ・業務としての「現場指導」が求められている指定管理者、施設管理や長期修繕などの「管理」中心の公務員に大きく分かれ、それぞれの役割が明確化している。
- ・実技では特に水泳に顕著なのが、温水プール指定管理者と公務員の水泳レベルの差があり、現在の研修ではレベルが下の研修生に合わせたカリキュラムでの進捗となり、クロール、平泳ぎの2種目の完成までが限界である。

<対応案>

- ・公務員と指定管理者を分けた研修を行っていく方向で、詳細を検討していきたい。

(2) （課題2）研修の履修時間規程と実態のカリキュラム時間数との乖離

- ・2017年度からCE研修となり、6年が経ち、カリキュラムの変更とともに、ヨット実技を行わない天城町での研修も実施され、4つの分類、最大6つの教科に分かれた細かい区分では、規程と実態が伴わず、カリキュラムの区分が対応しきれなくなっている。

<対応案>

- ・そのため、「分類や教科の数を減らし統合する方法」や「規程から履修時間の区分を外し、毎年決裁での履修時間の区分設定をする方法」など、役員相談の上、年度内に理事会に上程できるよう内容をまとめていきたい。

◆履修時間規程及び実際履修時間

分類	教科	履修時間 (規程)	履修時間 (沖縄)	分類	教科	履修時間 (規程)	履修時間 (沖縄)
学科	財団事業概要	2	2	実習	指導実習	7	15
	海レク総論	3	3		救急法・救助法	10	10
	海レク活動と安全	6	9		施設・器材管理	9	12.5
	センター管理・運営	8	9		環境学習	6	6
実技	集団行動法	10	18		財団プログラム	15	20
	カヌー	21	21	心肺蘇生法講習	11	18	
	ヨット	28	22.5	その他	式典・試験・講話等	10	16
	水泳	28	31.5				
	海レク	6	14.5		合計	180	243.0

2024年3月理事会に間に合うよう、全部または一部改正を行う方向で役員相談を進める。

10. 所感

【東條 剛之】

今回の研修では、課題を3つ掲げその対応を探った。一つは研修生の緊張感をいかにして持続させるかとした。日朝点呼は、最初から最後まで一貫して行う唯一のもので、研修初期は緊張感があり集団行動法で指導したとおりのメリハリのある行動をとっているが、研修後半ともなると、日々のルーティン化となり“おざなり感”が出てしまうため、どのようにして研修生の緊張感を維持させるかが課題だと考えていた。

以前は、教官のキャラクターで緊張感を保っていたように思えるが、それでは個人の資質に頼ってしまうため、誰が教官となってもある程度の緊張感を与える仕組みを作る必要があった。その方法は、前述の7(3)のとおりであるが、ある程度の成果を上げることができたと考える。

二つ目の課題は、研修生の実技スキル向上に比重を置くのではなく、海洋センターでの指導スキルを身に着けさせることとした。海レクの指導には実技スキルは必要だが、養成研修の試験は「〇〇ができる」となっているためスキル習得がメインとなってしまう傾向にあった。そこで、今回はカヌー実技時に、体験会でやっている初心者指導法の紹介、数名の研修生を指名し初心者指導の実演をさせることを行った。指導法の習得については、理事長の開講式挨拶で言及いただいていたことから、その件も引用して、実技研修は単に自身の実技スキルを身に着けるのではなく、指導法や練習法を学び、それを地元に戻り実践することを定期的に伝えた。指導スキルの習得方法については、まだまだ検討すべき点が多く、指定管理者と自治体職員、今後の履修内容などと併せて考えていかなければならない。

三つ目の課題はコロナ対応である。5類感染症に移行となったが、受け入れ時の対応は前回の徳之島で実施したときと同じ方法をとったことから陰性者のみで研修をスタートすることができた。初回の休務は外出禁止としたが、2回目以降は、私権を制限する法的根拠もないため、移動範囲(名護まで)を制限し外出を許可した。結果的に3回目の休務時に外出先でコロナに感染してしまった可能性が高く、陽性者が広がってしまった。昨年と比較し症状は軽いように思えるが、39度程度の発熱があり、ワクチンを打っていても確実に感染を防ぐことができないため、部屋移動などの対応が必要であり、その対応は煩雑極まりない。部屋移動以外にも、カリキュラムの変更など、陽性者が出た場合に対処しなければならない事項があるため、総合的に考えると、今後の養成研修において当面は休務を外出禁止することが望ましいと考える。外出できないことは、募集要項時に明記するとともに、研修中に購入が必要な場合はAMAZONなどを利用させることで対応したい。

【持田 雅誠】

4月に新たに養成研修担当チームに入ったが、初回ミーティングに課長から提示のあった。

「2024年度研修に大幅な改革を加えるために今年の養成研修をその試金石としていく」との目標に向けて今回の研修も取り組んだ。

大きな部分は、①実技スキル習得への偏重を改め、指導スキルの習得・上達を目指すこと ②研修生一人ひとりの主体性、積極性を引き出すため、研修に対し緊張感を保ち、チーム全体で取り組む雰囲気・意欲を醸成すること ③海洋センター等での活動の幅を広げて事業を活性化するために、課業プログラムの多様化を進めること、の3点になる。

私自身は後半からの参加になったが、過去の経験に照らしても、これら3つの取り組みが相乗効果を生み、研修全般が例年よりもより良い形で進んでいると感じられた。

もちろん「研修全体の雰囲気づくり」はチーフ、リーダー、班長といった中核メンバーの気質や意欲、フォローによる部分も大きいですが、今回の中核メンバーは十分にその責務を果たしてくれていたと思える。これは、近年進めている研修参加者の選定や退所などの厳格化が良い意味で影響を与え、全体の傾向として参加者のレベルが上がってきた結果ではないだろうか。

一方で、修了アンケートではそれほど多くはないものの研修への不平不満も散見された。経験上、不満は課業プログラム自体に対するものではなく、長期合宿による日常生活での不満や、指示の不統一が発端となっているものが多い。また、男性教官に相談できない女性研修生の悩みも1ヵ月という期間では出がちとなる。これに対しては今後、課業の指導・運営等をより明確に定義した上でサポートスタッフを活用したり、同時に女性サポートスタッフを増やしていくことで対応をしていきたいと考える。

【鈴木 昭正】

昨年度沖縄研修ではコロナ陽性者が発生により26名の研修生が退所となった。

そのため、「1名の陽性者も出さずに、研修を終了させる」ことを目的にしていた。

昨年度の反省を活かし、出発前の事前PCR検査の実施や那覇空港でのPCR検査・抗原検査、研修開始1週間は実技を行わない、初回休務日の外出禁止など、実施可能な対策をすべて行うとともに、マスク着用の徹底は再三研修生に注意を促してきた。

しかしながら、研修21日目での陽性者を発端に計20名の陽性者が発生することとなり、中盤以降はコロナの対応に追われることが多くなっていった。

今回の陽性者発症の要因は、3回目の休務日の外出を許可したことにより、研修生がホテル施設外の人と接触したことである。この研修が特定の参加者のみの合宿型集合研修であることから、外部とは隔離された状態で実施する場合には、研修開始一週間の間に、陽性者が発生しなければ、研修終了まで、陽性者が出ることはない想定される。

そのため、天城町研修も含め、コロナに配慮した対応をせざるを得ない間は、休務日のホテル外への外出は認めず、隔離研修での対応が必要不可欠であると考えている。

また、研修制度は昨年度と大きく変わっていないが、日朝点呼での指導の徹底や研修生のPC持参による講義中のPC利用やメール連絡等の業務効率化など、様々な点で改善を加えていっているおり、今回は養成チームでの改善が功を奏し、研修生のチームワークもよく、無事に全員学科・実技ともに合格できる雰囲気を醸成できたと感じている。

次は研修制度の大きな改善を役員との相談の上、進めていくことに注力し、B&G指導員や海洋センターの価値向上を担っていきたい。

1.1. 表彰者

優秀賞 1名

・駿河 雄太 新潟県阿賀町三川海洋センター

【選考理由】

研修生からの信頼も厚く、第2期チーフリーダーとして、教官と協力して、コロナ対応も徹底しながら、59名をまとめ、各グループ、班の絆を深めるとともに、全員合格に導いたため。

1 2. 外部講師及び海洋センター指導員

【外部講師】

氏名	所属団体	内容
岩崎 由純	一般財団法人日本ペップトーク普及協会	ペップトーク
小峯 力	中央大学	救急救命と生命倫理
中村 真衣		水泳実技
木尾 克己	中村真衣事務所	水泳実技
大橋 卓生	パークス法律事務所	リスクマネジメント
工藤 祐直	青森県南部町	全国指導者会講話
津幡 佳代子	公益財団法人 日本レクリエーション協会	レクリエーション実習
長原 洋一	一般社団法人さくらインヴァース	カヌーポロ実技
木村 亮太	一般社団法人さくらインヴァース	カヌーポロ実技
柳 堯比古	一般社団法人さくらインヴァース	カヌーポロ実技
玉城 拓	本部町今帰仁村消防組合	上級救命講習
池田 博人	孝和建商株式会社	体育館フロア維持管理
白木 俊郎	株式会社協栄	水泳プール維持管理
道越 勇夫	一般社団法人指定管理者協会	指定管理者制度

【海洋センター指導員】

氏名	所属センター	内容
尾道 輝寿	長崎県時津町	ヨット実技
阿瀬川 文輝	島根県浜田市三隅	水泳実技
古賀 博隆	福岡県朝倉市甘木	水泳実技
深澤 春生	山梨県甲斐市双葉	水泳実技
中村 大悟	大分県中津市耶馬溪	水上スキー実技
羽立 友一	大分県中津市耶馬溪	水上スキー実技
種継 武	兵庫県上郡町	研修運営
飯田 史哉	福井県大野市	カヌー実技
清野 昭雄	福島県小野町	レスキュー
曾根 由多	静岡県牧之原市相良	レスキュー
佐倉 亮	香川県池田海洋クラブ	カヌー実技
工藤 陽平	熊本県湯前町	カヌー実技

1 3. 別紙添付資料

(1) 教官反省・改善点フォーム (中島、大久保、竹谷)

- (2) 参加者名簿（都道府県別・班別）
- (3) 最終研修スケジュール
- (4) 参加者アンケートまとめ
- (5) 修了のしおり

以上